様式Ｃ-7-2

自己評価報告書

平成 22 年 4 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520366
研究課題名（和文）ニューカレドニア地域と周辺の危機に瀕した言語の文法記述および辞書の編纂
研究課題名（英文）A Study of the Grammar and Lexicons of Endangered Indigenous Languages in and around New Caledonia

研究代表者
大角　翠（OSUMI　MIDORI）
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号：10141293

研究代表者の専門分野：記述・フィールド言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：音声・文法記述、辞書・テキスト、ニューカレドニア言語、オーストロネシア語族、消滅の危機に瀕した言語

１．研究計画の概要

(1) 本研究はニューカレドニアと周辺地域の先住民語を調査、研究し、その文法の記述および辞書の編纂を目指すものである。ニューカレドニアに現存する２８の先住民語の大半は現代社会の変容の中で共通語のフランス語に圧され、消滅の危機に瀕している。しかしその多くがまだ十分な文法記述、辞書などの記録を持っていない。少数民族語の調査は多彩な言語現象や認知体系の解明により言語理論研究に大きな意義を持つだけでなく、言語の進化、先史人類の移動、異言語間の接触、発達過程を明らかにする上からも非常に重要である。また、言語がその民族の生活、伝統、文化の集大成かつ遺産であり、独特な世界観を映し出しているものであるという点からも、緊急に調査し記録、保持につとめる必要がある。

(2) 本研究計画では特にニューカレドニア中南部のネク語とティンリン語を主にフィールドワークにより調査研究する。言語音声・映像資料の収集、談話や口承文芸などの録音、テキストの分析を行い、最終的にはネク語の文法の記述、およびティンリン語とネク語の英・仏訳辞書の編纂を行う。あわせてオロエ語や周辺の島嶼の言語の実態や社会言語情況、言語シフトのメカニズムも明らかにする。

２．研究の進捗状況

(1) 研究代表者は毎年 8 月～9 月にニューカレドニアの先住民部落（ワウェ）とヌメアで現地調査を行い、ネク語話者から聞き取り調査、テキスト、談話、口承物語の録音、部落の伝統行事や生活の写真、ビデオ撮影などを行ってきた。録音は MD レコーダーおよびエディロールを用いて行い、できる限り現地で話者の協力のもと、文字おこしを行った。この言語の音韻体系は非常に難解で、話者の協力なしでは聞き取りは正確なものとはならない。これまでに辞書も文法書も一切書かれていない言語なので、現地調査は不可欠である。

(2) 記録・収集した言語（音声）資料やノートはコンピューター入力し（アルバイト助手の協力）、辞書項目、テキスト、文法項目毎に整理し、分析を行った。ティンリン語の辞書項目は既に大半を書き終え、細部の校正と辞書ツールへの変換を進行中である。ネク語の辞書は基本語彙を中心に 3000 語程度、既に記録済みである。ネク語の文法はカテゴリー毎の記述を進めている。

(3) チバウ・カナク文化センター、フランス CNRS の研究者とは協力関係を続け、更にニューカレドニア大学、シドニー大学、オーストラリア国立大学、オークランド大学でオセアニア研究者とのワークショップ、意見交換、また、資料の調査や収集を行なった。ティンリン語、ネク語以外のオロエ語、ヴァヌアツ、ニューブリテン島の言語の実体と社会言語情況の調査は協力者が行った。

３．現在までの達成度
③　やや遅れている
(理由)
(1) ニューカレドニアの社会言語情況について冒頭で述べたように先住民語を話す人口は年々減っており、特にティンリン語、ネク語とも 200～250 人程度の話者しか残っていない。そのため、首都のヌメアで調査することは難しく、先住民部落に滞在して直接住民から調査する必要があるが、部落内でさえ、日常的に現地語を使っているのは高齢者のみである。40 代前後の人々は高齢者と話すときは現地語を使うことができるが、若い人や子供とはフランス語を使用しているので、言語の知識も不完全だ。研究代表者は部落の長である男性(70 歳)を主にコンサルタントにしていたが、数年前から体調を壊し、予定していた調査ができないことが度々あった。そのため、別の 65 歳程度の男性を中心に 2、3 人の女性からも聞き取りをしていたが、この男性も昨年は健康が非常に悪化しほとんど調査が不可能になってしまった。このような事情で、別のコンサルタントを探したり、部落の行事その他で住人が忙しく仕事がはかどらないことが多かった。

(2) 音声資料の文字おこし、コンピューター入力が複雑で綿密な作業のため多くの時間を要し、アルバイト助手を用いても助手がひとりで間違いなく仕事をこなすのは難しい。そのため最終的には研究代表者が全ての資料を再度チェックせねばならず、作業は予定通り進まなかった。辞書項目は両言語とも３～６千語をカバーしていることに加え、現地の人が読めるものにするためフランス語を加えた 3 言語辞書をめざしていることもあり作業は容易ではない。

４．今後の研究の推進方策
(1) 辞書は英語、仏語、現地語のデータベース化を進め、双方向からの辞書づくりをめざす。そのため辞書ツールを活用し、最終的な出版の体裁を整えて行く。コンピューター入力作業はアルバイト助手を用い、できるかぎり能率をあげたい。仏語訳は海外協力者の協力及び国内の仏人の協力も得る予定である。

(2) 現地調査の期間を少し短縮し執筆時間を十分確保する。テキストのコンピューター入力や音声資料の分析はソフトを活用する。これまでの文法分析をもとに文法の概略を書き、そこに例などを加え、更に詳細な記述を行う。近隣の言語資料も加えた社会言語情況の概略も執筆し、出版できる体裁を整える。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① Osumi, Midori and Emiko Tsuji, Morpho-semantic features of Tinrin and Neku verbs and event-classifying verbal prefixes, *Tokyo University Linguistic Papers*, vol. 28, 173-195 頁、2009 年、査読有.
② 大角翠、ティンリン、ネク語に見られる動詞類別接頭辞の概念体系とイベント分類的機能、『東京女子大学比較文化研究所紀要』70 巻、1-17 頁、2009 年、査読有.
③大角翠、私のフィールドノートから－ネク語、『言語』６月号、80-85 頁、2007 年、依頼原稿、査読無.

〔学会発表〕（計３件）
①Osumi, Midori and Matthias Brenzinger, Changing language attitudes and language use, 2nd Workshop on Ryukyuan Heritage Languages-Assessment of Language Endangerment and Possibilities of Reversing Language Shift, March 2010 年、Tokyo.
② Osumi, Midori, The labile nature of Tinrin (New Caledonia) verb *fwi*, The 8th International Conference on Oceanic Linguistics, January 2010 年、 Auckland.
③Osumi, Midori and Emiko Tsuji, Combinatory subclasses in Tinrin / Neku event-classifying morphemes and their semantic motivations, The 7th International Conference on Oceanic Linguistics, July 2007 年、 Noumea.

〔図書〕（計４件）
①大角翠、あべ・ボストン、『ネズミのしっぽ－ニューカレドニアのおはなし（こどもの友 3 月号）』、福音館、2010：32.
②大角翠、メラネシアにおける言語とアイデンティティー、『オセアニア学』（吉岡政德監修／遠藤央他、編）、京都大学学術出版会、2009：531－542.
③大角翠、『事典　世界のことば 141』（梶茂樹、中島由美、林徹編）、大修館書店、2009：142-145.

〔その他〕
ニューカレドニアの少数言語現地調査　（ヌメア、ワウェ）2007 年 8、9 月、2008 年 8、9 月、2009 年 8、9 月